



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                                      |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 月刊DRF 第20号                                                                                           |
| Author(s)        | デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation                                                           |
| Description      | 事務局: 北海道大学附属図書館<br><a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの |
| Issue Date       | 2011-09-01                                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/73505">https://hdl.handle.net/2115/73505</a>                    |
| Type             | journal                                                                                              |
| File Information | DRFmonthly_20.pdf                                                                                    |





# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第20号

No. 20 September, 2011

【特集1】あの人に聞きたい！

【特集2】THE SUBVERSIVE PROPOSAL

<トピック>

ジャパンリンクセンター来春開設  
OAウィーク2011素材募集！

## 特集1 あの人に聞きたい！



DRFワークショップやその情報交換会などで聞かれた悩みを、関川雅彦運営委員(筑波大学附属図書館副館長)にぶつけてみました！ 関連シンポジウムのパネルディスカッションなどでの関川副館長の言葉に元気づけられた人も少なくないでしょう。ラジオで言えば、悩めるリスナーからの相談に、時には優しく時には厳しく答えるアニキ的DJ風。担当者のいろいろな悩みごとに、心底真面目にお答えいただきました！

Q. リポジトリの仕事にここ数年携わっています。やりがいもあり楽しく仕事していますが、伝統的な図書館業務から隔たっているような気がしてちょっと不安です。(係員)

大丈夫です。安心してください。仕事にやりがいを感じ、楽しいと思える貴方はラッキーです。覚えていますが、ランガナタンも「図書館は成長する有機体である」と言っています。図書館のサービスや業務は変化し続けています。今は伝統的な業務と思われるものも、かつては新しいサービスでした。貴方が学術情報を収集し加工し提供することで学習・教育・研究活動にささやかでも貢献したいと考えている限り、不安を抱く必要はありません。

Q. 外国の話で「義務化」という言葉をよく聞くようになりました。でも「忙しい忙しい」とよく言っている先生方のことを考えると、得策ではないようにも思います。嫌われ者の事業になっちゃわないでしょうか。(国立大学・IRWGメンバー)

なんらかのメリットを享受できる、あるいはデメリットを被るといった状況にならない限り、人はなかなか動こうとしません。メリットないしはデメリットがあれば「忙しい」でも教員は「義務化」に応じます。貴方の大学では「義務化」は教員にとってメリットないしはデメリットをもたらしますか。いずれにしても「義務化」は図書館ではなく大学が(あるいは部局が)決めることだと思います。図書館が嫌われ者になることはないでしょう。

Q. 最近、大手出版社のオープンアクセスジャーナルが多くなってきました。これから有料雑誌は減っていくのでしょうか？(国立大学・雑誌担当)

雑誌の刊行には、商業誌であろうと学会誌であろうと、オープンアクセスジャーナルであろうとなかろうと経費がかかります。その経費を読者(図書館)が負担するのか掲載論文著者が負担するのか、あるいは外部の助成資金で負担するのかによって、雑誌刊行のビジネスモデルが変わってきます。商業出版社は様々なビジネスモデルを模索しており、オープンアクセスジャーナルは確かに増えてきてはいますが、ある大手出版社の例ではまだ論文数の比率で数パーセントのレベルだとのことです。また、世界中で生産される論文数も増加しています。有料の商業誌や学会誌がすぐに減少するとは思えません。安心して資料購入費の確保に努めてください。

Q. 他大学の事例報告を聞いて、本学でも構築しなければと思いました。しかし、スタッフは乗り気でなく、考えてみれば先生の数が少ないので論文数もあまりないのです。がんばって構築すべきかどうか悩んでいます。(私立大学・課長)

機関リポジトリについては、図書館(あるいは図書館員)が思っているほど学内の理解を得られているわけではありません。そういった状況で機関リポジトリを構築するには、最初に誰かが「がんばる」ことが必要なのは確かです。貴方が大学にとって機関リポジトリが必要だと感じたのなら、がんばるのは貴方が最適かもしれません。でも、人はいつまでもがんばり続けるのは難しいものです。無理をしすぎないようにして、個人ではなく組織として事業を続けていけるよう工夫をしてください。機関リポジトリは大学の事業なのですから。なお、機関リポジトリの収録コンテンツ数にこだわる必要はありません。教員数が多い大学がコンテンツ数が多いのは当たり前です。

Q. 去年から機関リポジトリの担当になりました。担当は私一人で、他の仕事もあります。つい、後回しになって去年は何もできませんでした。他の職員も忙しいので頼みづらいし、どう進めていったらいいのか困っています。(国立大学・係長)

去年何もしなかったことに対して、誰かからなんらかの叱責を受けましたか。もし叱責を受けなかったとしたら、それは貴方の大学にとって機関リポジトリの意義がその程度だったということです。焦る必要はありません。機関リポジトリは息の長い事業です。貴方の大学の実情に応じて少しずつ進めればいいのです。進め方についてはDRFの研修を受けたり、シンポジウムに参加したりして他の大学の事例を参考にしてください。また、担当は貴方だとしても貴方一人ですべてを背負うことはやめましょう。機関リポジトリが貴方の担当で図書館が推進しているとしても、なにより大学の事業であることを忘れずに他の職員の協力を得るようにしましょう。

Q. 先生方とよく話をするようになって、とても刺激的でいろいろと目を見開かされました。いつも机に座っている課長にも一緒に研究室訪問に行ってほしいです。どう誘えばよいでしょうか？(国立大学・係長)

貴方は研究室訪問が課長の成長のためになるから同行してもらいたいのですか、それとも業務上課長が訪問することが必要だから同行してもらいたいのですか。課長の成長のためならば放っておきましょう。業務上必要ならば、リポジトリが上手くいくかいかないかはアンタの態度にかかっていると誓ってみてはどうでしょう。管理職ともなれば、誰もそれなりに成功体験を持っていますが、過去の経験から外れるような事態に直面すると怯えてしまいます。なんらかの具体的な動機付けがないと人はなかなか動かないものです。

# Stevan Harnad (1994)

## THE SUBVERSIVE PROPOSAL

スティーブン・ハーナッドの17年前のメール「THE SUBVERSIVE PROPOSAL」(転覆提案)を紹介します。このメールは、セルフ・アーカイブによるオープンアクセス実現を目指す原初的なアイデアとして大きな反響を呼んだのち、さまざまな部分的補正を経て進化し、今日のオープンアクセス思潮につながっています。

### 転覆提案(THE SUBVERSIVE PROPOSAL)

スティーブン・ハーナッド

1994

紙媒体での出版は早晚終焉を迎えるに違いないと楽観的予測がなされているところですが、しかし、人生は短く、いつか訪れるであろうその日も私にはまだひどく遠い先のことのように思えてなりません。以下は、その日の到来を劇的に早めるための体制転覆の提案です。この提案は、<esoteric=秘教的>(つまり、商売ではない、マーケットをもたない)科学・学術出版にのみ妥当します(もったも、畢竟それこそが学問的成果物の大半なわけですが)。学術的な著述を<売ろう>と考えている研究者は、本来的に、そして実際にもいません。我々の論文執筆の目的は商売ではなく公にすることそれ自体、すなわち、世界各地の同僚——これまた同じ秘教的な科学者や学者仲間——の目に触れ、関心を惹き、そして、積み重ねが命の学術研究という共同的営為にあつて、後続研究の礎となることです。しかし、数世紀もの間、こうした秘教的文献の書き手である我々は、自著に値札を付け、(それだけでなく少数ない)読者との間にあって自ら障壁を築いてしまふという、悪魔に魂を売るようなファウスト的契約に囚われてきました。必要悪というほかありません。(相応のコスト発生を伴う)紙媒体での出版しか選択肢がなかった時代には、それが自分の研究を公にする唯一の方法だったからです。

しかし、今は別の手段があります。公開ファイルサーバ(Public FTP)です。仮に、今日にでも、我々秘教的文献の著者が、世界のどこからでもアクセスできるFTPアーカイブをみなで構築し、これから生み出す秘教的著述のすべてをそこに置いて利用可能にすることとしたとします。そうすれば(殊に、この秘教的な学問の世界においては)紙公表から純然たる電子公表への待望の移行が即座に始まるはずで、物理学のコミュニティではそのような動きがすでに起きており、ポール・ギンスバーグによる高エネルギー物理学(HEP)のプレプリント・ネットワークは世界各国に20,000人のユーザを抱え、1日に35,000のヒット数を誇っています。後続する他のさまざまな学術分野は、ポール・サウスワースのCICNetが利用できると思います。残る要素は、(1)品質管理(すなわち、査読と編集作業)——現状、これはもっぱら紙媒体出版者の仕事となっています——それから、(2)そうした専制的品質管理体制が醸成してきた紙出版の権威感、この2点ぐらいではないでしょうか。仮に、あらゆる研究者があらゆる研究者のプレプリントをanonymous ftp(やgopher、WWW、そして未来のより先進的な探索・利用技術)で利用できることが当たり前、という世界になったとすれば、査読が済んで紙で公のものとなる>ことが決まったからといって、自分のプレプリントをそうした共有の場から取り下げよう>と思う研究者はくひりもないでしょう。取り下げの代わりに、査読を経て公にされたバージョンで差し替えていくのが自然の成り行きです。紙媒体出版者は、このような電子公表オンリーの世界が到来した場合に大幅に下がるであろう必要経費(多くの出版者は紙媒体の75%のコストになると見積もっていますが、私は25%以下だと見積もっています)を予備収入(掲載料、学会の会費、大学からの出版刊行予算、政府からの刊行助成など)で捌く、という形に(研究者コミュニティと協力しつつ)自己変革していくこととなるでしょう。さもなければ、それを実現する新世代の電子オンリーの公表主体を研究者コミュニティ自身が創造していくのを、指をくわえて見守るしかないでしょう。

これで転覆は完了です。というのも、(秘教的で、マーケットをもたない)査読文献がその本拠地から発信され、しかも、秘教的知識のスムーズな流通のための経費は必要最低の実費に最適化され、つまり(我々すべてにとって望ましいことに)無料となるからです。

es·o·ter·ic  adj \,e-sa-'ter-ik, -'te-rik\

#### Definition of ESOTERIC

1 a : designed for or understood by the specially initiated alone  
<a body of esoteric legal doctrine — B. N. Cardozo>

b : requiring or exhibiting knowledge that is restricted to a small group <esoteric terminology>; broadly : difficult to understand <esoteric subjects>

2 a : limited to a small circle <engaging in esoteric pursuits>

b : PRIVATE, CONFIDENTIAL <an esoteric purpose>



学問について、esotericという表現を使って特徴つけた最初のケースはばくが知るかぎり、Thorstein VeblenのHigher Learning in America (1918)です。これに対して、Veblen学者(あまりいない)は「秘教的」という訳語を使っています。要するに、Harnadの趣旨は、学術コミュニケーションは学者コミュニティの中で閉じている(つまりesotericな)のだから、電子的に安価に情報共有できるようにすれば、価格なんという話はなく、既存の出版産業の介在が不要になるはずだという論理です。

Harnadの転覆提案は、当時既にあった危機感や動きに対して、きっかけと方向性を示すことにより、それらを更に拡大させることが目的だったと感じました。内容もさることながら、そのタイミングも、人の心を動かす要因になったと思います。



藤原恵理子 (金沢大学)

Yorker, 7 Oct. 2002

**The scholarly author wants only to PUBLISH them .....**

#### Origin of ESOTERIC

**But today there is another way .....**



WWW以外の選択肢が複数あったことに驚きました。ハーナッドさんの確固たる意思が多くの人を動かし、さまざまな手段を試みた結果、今の機関リポジトリが主流になったんだなあ、と時代の(受動的でない)大きな流れを感じ、自分も今その中にいるんだな、思ったりもしました。今後、OAと出版者がどのように競合していく時代になるのか、純粋に楽しみです。

OAの原点がシンプルに述べられて感動的です。これだけのことから、多様な議論が20年近くも繰り返されているのですが、ハーナッド先生がいうたいことの原点(要点)はここにあります。この破壊的提案に続いてよく知った人々がメールで議論しており、これも興味深いものです。まあ、20年近くもよく同じようなことを堂々巡りのように議論しているな、とも感じます。ちなみに、Public FTPなどは死語で現在20代~30代前半の人は知らないのが普通かもしれません。ハーナッドは、esotericなコミュニティ=研究者コミュニティで、人類の知見を共有するのがOAだと主張し続けており、NIH流のpublic accessはOAではない、と言っていたのですが、この数年はさすがに妥協したことを言うようになっていました。人類の知見という場合、ハーナッドは科学は自然のカテゴリー化を行う営みであり、この科学的カテゴリーを無償で即時にesotericな人々で共有するのがOAだと考えていますね。これは、ハーナッドがポインダーとのインタビューで述べていることです。



内島秀樹 (DRF国際連携WG・金沢大学)

工藤絵理子 (DRF国際連携WG・九州大学)

# スティーブン・ハーナットの 「転覆提案」とは

リチャード・ポインダー による解説

OAムーブメントの起源を知るためには、認知科学のスティーブン・ハーナッド (Stevan Harnad) 教授が、彼が「転覆提案」と呼んでいる意見をバージニア工科大学で運営される電子ジャーナル・メーリングリストに投稿した10年前の1994年に遡る必要がある。(中略)メーリングリストの意見のほとんどはたいいていすぐに忘れ去れるものであるが、ハーナッドの提案はオンライン上で大きな議論を引き起こし(皮肉なことに後に1冊の本としてまとめられた)、すぐに胎動期のOAムーブメントの事実上の宣言書となった。(中略)しかし、どのようにしてOAムーブメントは、明らかに雑多なメーリングリスト中の1つの意見から、今日見られるような強力な変革の力へと成長したのだろうか。(中略)SPARCがまず取り組んだのは代替となる、より価格の安い雑誌の推奨であり、arXivは集中管理の主題ベースのプレプリント・リポジトリであった。一方、ハーナッドは学術論文のすべてをインターネット上で自由に利用できるようにしたかった。すなわち、彼の信ずる目標は、研究者が従来雑誌で論文を発表し続けると同時に、ローカルにも同じ論文をセルフアーカイブすることにより最も達成されるものであった。さらに、革命を起こすことに取り付かれていた(また、修辞法と論争術という二つながらに持つ者は稀な、この二つのオに恵まれた)ハーナッドはその後の10年間で、研究者仲間を言葉巧みに誘い、どなりつけ、熱弁をふるい、弁護し、また、批判者を降伏させるまで(あるいは少なくとも沈黙させるまで)口撃して過ごした。したがって、ハーナッドがOAムーブメントを発明したとは言えないが、その驚異的なエネルギーと決断力は、本当に必要なことに焦点を絞った見識と相まって、疑いなく彼にオープンアクセスの主導者の称号を与えるものである。

(リチャード・ポインダー(2004)「ポインダーの視点: 10年を経て」)

THE SUBVERSIVE PROPOSAL 原文

We have heard many sanguine predictions about the demise of paper publishing, but life is short and the inevitable day still seems a long way off. This is a subversive proposal that could radically hasten that day. It is applicable only to ESOTERIC (non-trade, no-market) scientific and scholarly publication (but that is the lion's share of the academic corpus anyway), namely, that body of work for which the author does not and never has expected to SELL the words. The scholarly author wants only to PUBLISH them, that is, to reach the eyes and minds of peers, fellow esoteric scientists and scholars the world over, so that they can build on one another's contributions in that cumulative, collaborative enterprise called learned inquiry. For centuries, it was only out of reluctant necessity that authors of esoteric publications entered into the Faustian bargain of allowing a price-tag to be erected as a barrier between their work and its (tiny) intended readership, for that was the only way they could make their work public at all during the age when paper publication (and its substantial real expenses) was their only option. But today there is another way, and that is PUBLIC FTP: If every esoteric author in the world this very day established a globally accessible local ftp archive for every piece of esoteric writing from this day forward, the long-heralded transition from paper publication to purely electronic publication (of esoteric research) would follow suit almost immediately. This is already beginning to happen in the physics community, thanks to Paul Ginsparg's HEP preprint network, with 20,000 users worldwide and 35,000 "hits" per day, and Paul Southworth's CInet is ready to help follow suit in other disciplines. The only two factors standing in the way of this outcome at this moment are (1) quality control (i.e., peer review and editing), which today happens to be implemented almost exclusively by paper publishers, and (2) the patina of paper publishing, which results from this monopoly on quality control. If all scholars' preprints were universally available to all scholars by anonymous ftp (and gopher, and World-Wide Web, and the search/retrieval wonders of the future), NO scholar would ever consent to WITHDRAW any preprint of his from the public eye after the refereed version was accepted for paper "PUBLICATION." Instead, everyone would, quite naturally, substitute the refereed, published reprint for the unrefereed preprint. Paper publishers will then either restructure themselves (with the cooperation of the scholarly community) so as to arrange for the much-reduced electronic-only page costs (which I estimate to be less than 25% of paper-page costs, contrary to the 75% figure that appears in most current publishers' estimates) to be paid out of advance subsidies (from authors' page charges, learned society dues, university publication budgets and/or governmental publication subsidies) or they will have to watch as the peer community spawns a brand new generation of electronic-only publishers who will. The subversion will be complete, because the (esoteric - no-market) peer-reviewed literature will have taken to the airwaves, where it always belonged, and those airwaves will be free (to the benefit of us all) because their true minimal expenses will be covered the optimal way for the unimpeded flow of esoteric knowledge to all: In advance.

Stevan Harnad - Cognitive Science Laboratory, Princeton University  
June 27, 1994

## 転覆提案の反響とその後の展開

当時の反響については、Scholarly Journals at the Crossroads: A Subversive Proposal for Electronic Publishing (<http://www.arl.org/bm~doc/subversive.pdf>) にまとめられています(第1章が「転覆提案」原文になっています)。

また、2004年(10年後)や2009年(15年後)には、ハーナッド自身も原提案を回顧しつつ、FTP集中システムでなくOAI-PMHによる分散システムで実現できるだろう等の補正をしています。併せて読んでみましょう。

・THE 1994 "SUBVERSIVE PROPOSAL FOR ELECTRONIC PUBLISHING" AT 10  
<http://listserver.sigmaxi.org/sc/wa.exe?A2=ind04&L=american-scientist-open-accessforum&D=1&O=D&F=1&S=&P=58204>

・The 1994 "Subversive Proposal" at 15: A Critique  
<http://openaccess.eprints.org/index.php?/archives/669-guid.html>  
<http://openaccess.eprints.org/index.php?/archives/670-guid.html>

初めて「転覆提案」を聞いた時、正直「持続可能なOAの実現のためには、査読論文をセルフアーカイブする「だけ」では片手落ちじゃないか」と感じました。その後、ラッセル氏(2009年当時のALPSP代表)の「リポジトリはジャーナルの査読体制に寄生している」という発言(※)を知って、ショックでした。それ以来、図書館はリポジトリを頑張るだけでなく、ジャーナルそのものを知り、グリーンとゴールドをバランスよく進めなくてはならないと、悩みながら仕事をしています。今回改めて「転覆提案」を読み直しました。「最小限のコストで、本来あるべき場所から査読論文が発信され、最適な方法で流通し、誰もが無料で読める」。今の価値観でみても変わらないOAの本質ですね。それが1994年に宣言されていたことに感動し、未だ実現できないことに落胆し、図書館が果たすべき役割を再認識しました。「転覆後の世界に図書館は不要かもしれない」と言って、歩みを止めるわけにはいかないのだと。  
※[http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2009/pdf/8/01-2\\_Nick\\_Japanese\\_checked.pdf](http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2009/pdf/8/01-2_Nick_Japanese_checked.pdf) のp.19

ハーナッドには良くも悪くも教祖的イメージがつきまとうのですが、この提案にも「秘教的」とか「ファウスト的契約」といった言葉が効果的に使われていて、すでにそうした雰囲気を出しています。ただ、これは豊かな教養に裏打ちされた独特のユーモアだと思います。

うわー、噂に聞いていましたが初めて原文を見ました。ぱっと見ただけでもえらく難解な英語ですねー、今回の超訳した日本語でさえ難しいっ！1994年と言えば、電子ジャーナルなんかぜんぜん無い頃ですよ。1995年の3月に「WWW」っていう珍しいモノを見て、学術情報センターからわざわざ北大の先生の研究室に出張した記憶があります。メールだってそんなに多くの人が使っていなかった時代じゃないでしょうか。そんな頃に超ぶっこんだ(?)提案をメールで出したことにもびっくりです。どんな議論が起こっていたのかも知りたくなりますね。

刺激的ですごく面白いです。ハーナッドの文章はまさに「コンテンツとサービスのレイヤーを分ける」の原点のように感じました。このときには、まず研究者コミュニティでの共有が考えられていたのですね。「これで転覆は完了です」——当時メーリングリストでこれを読んだ人も興奮しただろうなあ。

「転覆提案」という言葉は聞いたことがありますが、きちんと内容を読んだのは恥ずかしながら初めてでした。「紙→電子への展開が有料→無料への転回へとつながる」ということを意味していたのですね。当時としては誰ひとり思いもよらない提唱だったでしょうが、ここがグリーンOAの原点だったのかと考えると、Harnad氏の勢いの良さ(というよりぶっつとび加減?)を見習いたい気持ちです。それにしてももうちょっと前向きな単語なかったんですかね…。「転覆」や「破壊」のような単語が使われているのを見ると、必ずしもこの転回を歓迎する研究者ばかりでない状況や業界への辛辣な思いがいろいろとうかがえます。

熱いメッセージですね。20世紀終盤はInternetの世界に戸惑いながらも、プレプリント・サーバーの運用にも携わり、学術情報流通の素晴らしさを実感していました。当時を思い出すと「転覆提案」などは頭に入っており、自分の不勉強さを恥じるばかりですが、後年、機関リポジトリも担当し、OAとは不思議な縁を感じます。

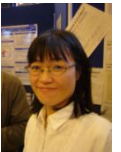
購読料、というものが消失するから、既成出版者サイドでは掲載料等の予備収入(=事前の収入)だけがビジネスに動くことになる、というわけですね。現在のオープンアクセスジャーナルの動向を予感させるような指摘だと思います。



森いづみ  
(国立情報学研究所  
学術コンテンツ課)



栗山正光  
(DRFアドバイザー・  
常磐大学)



鈴木雅子  
(DRF国際連携WG・  
旭川医科大学)



土出郁子  
(DRF国際連携WG・  
大阪大学)



谷奈穂  
(DRF企画WG・  
千葉大学)



加藤晃一  
(DRF企画WG集会  
企画・人材養成  
サブWG・浜松医  
科大学)



杉田茂樹  
(DRF国際連携WG・  
小樽商科大学)

# JaLC (ジャパンリンクセンター) 2012年春に開設 ～ 国内初のDOI付与機関

独立行政法人科学技術振興機構(JST)では、学術コンテンツの所在情報を一元的に登録・管理し、国内外のデータベースから学術コンテンツへの恒久的リンクを容易化することで学術情報の流通を促進する、ジャパンリンクセンター(略称:JaLC)の構築を進めています。

JaLCは、国際的に使われている識別子Digital Object Identifier (DOI)の付与機関となり、論文等の個々の学術コンテンツにDOIを付与して、国内外のデータベースからの学術コンテンツへのリンクや、引用文献データから学術コンテンツへの恒久的リンクを実現します。

JaLCはオールジャパンの関係機関により共同運営するものであり、現在、国立国会図書館、国立情報学研究所、農林水産研究情報総合センター、大学図書館、JSTなどで協議を行いながら開設のための準備を行っています。システム開発はJSTが担当しており、本格的な運用開始は平成24年度初頭を予定しています。



カジュアルフライデーのJaLC担当スタッフです。  
♪ よろしくおしま～す ♪

## ジャパンリンクセンター

### 【電子ジャーナルへのアクセス性が向上】

・論文の全文、図表、引用文献等の情報が入手し易くなる。  
・ジャパンリンクセンターが国内外電子ジャーナルサイトをつなぎ、最新のリンク情報を取得できる。また、平文解析リンク作成機能、誤リンク検出機能によりリンクの品質が向上する。

- I 全文へのリンクの実現
- II データベース間の相互リンク
- III 引用文献・被引用文献のリンクの実現
- IV 冊子体の所蔵案内の実現



★本件に関するお問い合わせは、以下にお願いします。

独立行政法人科学技術振興機構  
(JST)イノベーション推進本部 知識基盤情報部  
電子ジャーナル担当  
宮川 謹至(よしゆき)、加藤 齊史(たかふみ)  
電話 03-5214-8837 e-mail t2kato@jst.go.jp



## オープンアクセスウィーク2011素材募集！



上:ロゴ類はオープンアクセスウィーク公式ウェブサイトからダウンロードできます。(http://www.openaccessweek.org/page/english-high-resolution-1)、左:2009年チラシ(RCuresLLプロジェクト)、右:2010年ポスター(DRF)

本学ではこんな  
の作りました。  
学内各所に貼  
る予定です！

個人的に考  
えてみたんだ  
けどこんなの  
どうかな？

10月24日～30日のオープンアクセスウィーク2011に向けて、盛り上げるためのグッズ等を募集します。ポスター、チラシ、パンフレット、三角スタンドなどのグッズ、バッジデザイン、動画、紙芝居など何でもあり。ルールは2つだけ、

- ・ベースはオレンジ(公式カラー)
  - ・ロゴまたは「OAW」「oaw」等の文字をどこかに入れる
- お送りくださった作品は、オープンアクセスウィーク2011日本公式サイトに掲示し、誰でもダウンロード・改変・再利用できるものとします。

募集期間:平成23年9月1日～10月23日

(OAW期間中に作品人気投票します。記念品あり！)

製作方法:PowerPoint等、ファイル内容の改変・加工が可能な一般的なソフトウェア(サイズは自由)。動画等のマルチメディア作品の場合はとくに形式は問いません。

送付先: [oaw@lib.hokudai.ac.jp](mailto:oaw@lib.hokudai.ac.jp)

次号  
予告

【特集1】第1回DRF機関リポジトリ新任担当者研修(広島会場)レポート  
【特集2】ICOLC第13回欧州会議 “OA Issues” セッション

編集後記:字の多い号になってしまいました。転覆提案は今なお刺激的ですね。以降此方のオープンアクセスへの努力に頭が下がります。「ふ」で始まる川柳、引き続き募集中！(SSMS)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 [gekkandrf@gmail.com](mailto:gekkandrf@gmail.com)

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF第20号 平成23年9月1日発行 デジタルリポジトリ連合